

授業科目	言語発達障害演習Ⅰ	担当教員	佐々木 勇輝		
対象年次・学期	1年・後期	必修・選択区分	必修	単位数	
授業形態		授業回数	15回	時間数	30時間
授業目的	言語発達障害の評価の目的と方法について理解する。 幼児期の児童との関わり方について学ぶ。				
到達目標	心理検査（知能検査、発達検査、言語検査）ができる。				
テキスト・参考図書等	（参）言語聴覚士のための臨床実習（小児編） 著者名：深浦順一 発行所：建帛社 （参）改訂版 心理検査の実際 著者名：澤田 丞司著 発行所：新興医学出版社				
評価方法・評価基準	評価方法	評価割合(%)	評価基準		
	試験	80	筆記試験と小テスト、提出物で評価する。		
	レポート	0			
	小テスト	15			
	提出物	5			
その他	0				
履修上の留意事項	欠席しないこと、復習すること。				
履修主題・履修内容	回	履修主題	履修内容		
	1	心理検査	ガイダンス、心理検査の目的と位置づけ		
	2	知能検査	田中ビネー知能検査Ⅴ		
	3	知能検査	田中ビネー知能検査Ⅴ		
	4	知能検査	グッドイナフ人物画知能検査		
	5	発達検査	遠城寺式乳幼児分析的発達検査		
	6	言語検査	S-S 法言語発達遅滞検査		
	7	言語検査	S-S 法言語発達遅滞検査		
	8	言語検査	LC スケール		
	9	言語検査	質問応答関係検査		
	10	言語検査	PVT-R 絵画語い発達検査		
	11	心理検査	S-M 社会生活能力検査		
	12	心理検査	Vineland-2 適用行動尺度、乳幼児精神発達診断法など		
	13	保育園実習	健常発達を念頭におき、保育園にて各年齢の児童と関わる		
	14	保育園実習	健常発達を念頭におき、保育園にて各年齢の児童と関わる		
15	心理検査に関する国家試験問題	国家試験形式問題を解く			

授業科目	呼吸発声発語系の構造・機能・病態	担当教員	飯島 治之		
対象年次・学期	1年・後期	必修・選択区分	必修	単位数	
授業形態		授業回数	10回	時間数	20時間
授業目的	正常な言葉の生成とその異常との関係を学び、それらに関連付けて、嚥下障害や音声障害といった病態の理解を深める。				
到達目標	・呼吸、発声、発語に必要な器官の構造・機能を学び書けるようになる。 ・発声、摂食嚥下に影響を及ぼす病態について学ぶ。				
テキスト・参考図書等	講師配布資料				
評価方法・評価基準	評価方法	評価割合(%)	評価基準		
	試験	100	定期試験にて評価を行う		
	レポート	0			
	小テスト	0			
	提出物	0			
	その他	0			
履修上の留意事項	毎回授業のボリュームがあるので、予習復習をしっかりとすること。				
履修主題・履修内容	回	履修主題	履修内容		
	1	構音器官の基本構造 1	鼻腔の構造と機能		
	2	構音器官の基本構造 2	咽頭筋群とその運動 舌・口蓋筋群とその運動		
	3	喉頭の基本構造 1	喉頭の枠組み、関節、筋、声帯、粘膜、神経と血管		
	4	喉頭の基本構造 2	喉頭筋群とその機能 気管および気管支の構造と機能		
	5	呼吸器系の基本構造 1	気管及び気管支の構造と機能		
	6	呼吸器系の基本構造 2	肺の構造と機能		
	7	呼吸運動 1	胸膜と呼吸運動		
	8	呼吸運動 2	呼吸機能検査		
	9	呼吸器系の病態 1	発声、摂食嚥下に影響を及ぼす呼吸器疾患について		
	10	呼吸器系の病態 2	誤嚥性肺炎の機序と治療		

授業科目	構音障害 I	担当教員	阿部 由美		
対象年次・学期	1年・後期	必修・選択区分	必修	単位数	
授業形態		授業回数	15回	時間数	30時間
授業目的	運動障害性構音障害のタイプ分類や発生機序を学ぶ。また、タイプ別の発話特徴を理解する。				
到達目標	運動障害性構音障害の発生機序を理解する。タイプ分類ができる。				
テキスト・参考図書等	言語聴覚士のための運動障害性構音障害				
評価方法・評価基準	評価方法	評価割合(%)	評価基準		
	試験	80	定期試験 80%、小テスト 20%		
	レポート	0			
	小テスト	20			
	提出物	0			
	その他	0			
履修上の留意事項	欠席せず、予習復習をすること。				
履修主題・履修内容	回	履修主題	履修内容		
	1	運動性構音障害とは	構音障害と高次脳機能障害		
	2	運動性構音障害とは	定義と種類 STの役割		
	3	ことばの産生と仕組み	発声・構音器官の構造（呼吸器系）		
	4	ことばの産生と仕組み	発声・構音器官の構造（呼吸器系）		
	5	ことばの産生と仕組み	発声・構音器官の構造（喉頭）		
	6	ことばの産生と仕組み	発声・構音器官の構造（喉頭）		
	7	ことばの産生と仕組み	発声・構音器官の構造（付属管腔）		
	8	ことばの産生と仕組み	発声・構音器官の構造（付属管腔）		
	9	ことばの産生と仕組み	ことばの神経機構		
	10	運動性構音障害の病態	運動性構音障害の分類		
	11	Dysarthria の原因疾患	錐体路、錐体外路、小脳、脳血管疾患、変性疾患		
	12	Dysarthria の原因疾患	錐体路、錐体外路、小脳、脳血管疾患、変性疾患		
	13	タイプ分類と疾患	痙性構音障害、弛緩性構音障害、失調性構音障害、運動低下性／過多性構音障害、混合性構音障害		
	14	タイプ分類と疾患	痙性構音障害、弛緩性構音障害、失調性構音障害、運動低下性／過多性構音障害、混合性構音障害		
15	タイプ分類と疾患	痙性構音障害、弛緩性構音障害、失調性構音障害、運動低下性／過多性構音障害、混合性構音障害			

授業科目	高次脳機能障害Ⅰ	担当教員	松山 大輔		
対象年次・学期	1年・後期	必修・選択区分	必修	単位数	
授業形態		授業回数	15回	時間数	30時間
授業目的	高次脳機能障害について各症状とその発生メカニズム、評価、リハビリテーションについて基本的な知識を学ぶ				
到達目標	・各種高次脳機能障害について理解および説明ができる				
テキスト・参考図書等	(教) 標準言語聴覚障害学 高次脳機能障害学 第3版 発行所：医学書院 (教) 高次脳機能障害ポケットマニュアル 第3版 著者名：原寛美 発行所：医歯薬出版				
評価方法・評価基準	評価方法	評価割合(%)	評価基準		
	試験	80	定期試験および提出物にて評価を行う。		
	レポート	0			
	小テスト	0			
	提出物	20			
その他	0				
履修上の留意事項	高次脳機能障害は「見えない障害」と呼ばれ、障害は多岐にわたる。毎回しっかり復習すること。				
履修主題・履修内容	回	履修主題	履修内容		
	1	高次脳機能障害とは	高次脳機能障害の概要について学ぶ		
	2	失行	失行のタイプやメカニズムについて学ぶ		
	3	失行	失行のタイプやメカニズムについて学ぶ		
	4	失認	失認のタイプやメカニズムについて学ぶ		
	5	半盲と半側空間無視	半盲と半側空間無視の違いやメカニズムについて学ぶ		
	6	記憶障害	記憶の種類とその障害、メカニズムについて学ぶ		
	7	注意障害	注意機能とは何か、注意障害でどのような症状を呈するのかについて学ぶ		
	8	注意障害	注意機能とは何か、注意障害でどのような症状を呈するのかについて学ぶ		
	9	遂行機能障害	遂行機能とは何か、遂行機能障害でどのような症状を呈するのかについて学ぶ		
	10	認知症	認知症のタイプやメカニズム、中核症状と行動心理症状について学ぶ		
	11	外傷性高次脳機能障害	外傷性高次脳機能障害の特徴、問題点、リハビリや社会資源について学ぶ		
	12	脳の部位からみた高次脳機能障害	各症状と脳の機能との関係を復習する		
	13	事例検討	事例を通して高次脳機能障害の症状をとらえ、リハビリテーションについて学ぶ		
	14	事例検討	事例を通して高次脳機能障害の症状をとらえ、リハビリテーションについて学ぶ		
15	事例検討	事例を通して高次脳機能障害の症状をとらえ、リハビリテーションについて学ぶ			

授業科目	耳鼻咽喉科学	担当教員	實川 純人		
対象年次・学期	1年・後期	必修・選択区分	必修	単位数	
授業形態		授業回数	10回	時間数	20時間
授業目的	言語聴覚士の業務に密接な耳鼻咽喉科疾患の、病態と診断、治療学について学び、必要な知識を身につける。				
到達目標	・耳科関連の疾患の特徴と治療について知る。・鼻科関連の疾患の特徴と治療について知る。・頭頸部外科領域の疾患の特徴と治療について知る。				
テキスト・参考図書等	(教) New Simple Step 耳鼻咽喉科 総合医学社				
評価方法・評価基準	評価方法	評価割合(%)	評価基準		
	試験	100	定期試験にて評価を行う		
	レポート	0			
	小テスト	0			
	提出物	0			
その他	0				
履修上の留意事項	欠席せず、予習復習をすること。				
履修主題・履修内容	回	履修主題	履修内容		
	1	耳科学	聴覚系の解剖、生理、検査		
	2	耳科学	手術、遺伝子診断		
	3	耳科学	疾患の症候・診断・治療		
	4	耳科学	前庭機能の基礎と臨床		
	5	鼻科学	鼻・副鼻腔の基礎と臨床①		
	6	鼻科学	鼻・副鼻腔の基礎と臨床②		
	7	喉頭科学	喉頭、音声の基礎と臨床		
	8	気管・食道科学	気管食道口腔咽頭の基礎と臨床		
	9	頭頸部腫瘍学	頭頸部腫瘍の基礎と非手術治療		
10	頭頸部腫瘍学	頭頸部腫瘍の手術治療と術後機能			

授業科目	失語症Ⅰ		担当教員	北風 祐子	
対象年次・学期	1年・前期		必修・選択区分	必修	単位数
授業形態			授業回数	20回	時間数 40時間
授業目的	失語症についての定義、知識を習得し、失語症古典的分類におけるそれぞれの特徴を把握し鑑別する。				
到達目標	<ul style="list-style-type: none"> ・脳の基本構造と言語中枢について理解する ・失語症の定義について説明できる ・失語症の原因疾患と症状について理解する ・失語症の各タイプの特徴を説明できる 				
テキスト・参考図書等	(教) 失語症臨床標準テキスト 医歯薬出版株式会社 (教) 病気がみえる vol.7 脳・神経 第2版 (参) 言語聴覚士テキスト 第3版 医歯薬出版株式会社				
評価方法・評価基準	評価方法	評価割合(%)	評価基準		
	試験	100	定期試験で評価を行う		
	レポート	0			
	小テスト	0			
	提出物	0			
その他	0				
履修上の留意事項	古典的失語症分類においてグループワークを実施します。積極的に参加して確実な知識を身につけること。				
履修主題・履修内容	回	履修主題	履修内容		
	1	オリエンテーション	この科目の目的、学習の仕方について		
	2	大脳の機能解剖 (1)	脳全体の構造		
	3	大脳の機能解剖 (2)	前頭葉、側頭葉		
	4	大脳の機能解剖 (3)	頭頂葉、後頭葉、基底核と視床		
	5	脳の機能とこころ	記憶、学習、感情、ことば		
	6	失語症とは何かを知る	失語症の定義、失語症研究の歴史、原因疾患、病巣について学び、失語症という障害を概観する		
	7	失語症とは何かを知る	失語症の定義、失語症研究の歴史、原因疾患、病巣について学び、失語症という障害を概観する		
	8	失語症状①聴覚的理解の症状	聴覚的理解の症状として出現する、語音認知、語の意味理解、構文の理解、聴覚的把持力について学ぶ。		
	9	失語症状②発話面の症状・復唱の症状	喚語困難、迂言、保続、錯語、ジャルゴン、構文の障害、再帰性発話、発語失行(失構音)、非流暢などの症状について学ぶ。復唱については、聴覚認知-把持・処理-発話のステップを含む復唱の障害機序を学ぶ。		
	10	失語症状②発話面の症状・復唱の症状	喚語困難、迂言、保続、錯語、ジャルゴン、構文の障害、再帰性発話、発語失行(失構音)、非流暢などの症状について学ぶ。復唱については、聴覚認知-把持・処理-発話のステップを含む復唱の障害機序を学ぶ。		
	11	失語症状③読み書きの症状	仮名と漢字の違い、音読と読解の違い、錯読、自発書字と書き取りの違い、錯書などについて学ぶ。		
	12	失語症状④その他の失語症	数字と計算の障害もよく観察される。また、無言、保続、反復言語、視野障害など失語症に随伴しやすい症状について学ぶ。		
	13	失語症のタイプ分類	失語症のタイプ分類をめぐる歴史について概観し、それぞれの失語症について理解する。		
	14	失語症のタイプ分類	失語症のタイプ分類をめぐる歴史について概観し、それぞれの失語症について理解する。		
	15	失語症のタイプ分類	失語症のタイプ分類をめぐる歴史について概観し、それぞれの失語症について理解する。		
	16	失語症のタイプ分類	失語症のタイプ分類をめぐる歴史について概観し、それぞれの失語症について理解する。		
17	失語症のタイプ分類	失語症のタイプ分類をめぐる歴史について概観し、それぞれの失語症について理解する。			

	18	失語症の評価	失語症の臨床において使用される各種検査について、その対象・目的や解釈について学ぶ。
	19	失語症の評価	失語症の臨床において使用される各種検査について、その対象・目的や解釈について学ぶ。
	20	失語症の評価	失語症の臨床において使用される各種検査について、その対象・目的や解釈について学ぶ。

授業科目	失語症演習Ⅰ		担当教員	阿部 由美	
対象年次・学期	1年・後期		必修・選択区分	必修	単位数
授業形態			授業回数	15回	時間数 30時間
授業目的	言語聴覚療法の基本的な考え方・情報収集と評価の診断の技法を習得する。				
到達目標	標準失語症検査（SLTA）の評価手技を習得する				
テキスト・参考図書等	適宜、資料を配布。（参）言語聴覚療法 臨床マニュアル 改訂第3版				
評価方法・評価基準	評価方法	評価割合(%)	評価基準		
	試験	80	定期試験（筆記／実技）80%、小テスト10%、提出物10%にて評価を行う。		
	レポート	0			
	小テスト	10			
	提出物	10			
その他	0				
履修上の留意事項	1回でも欠席すると検査の実施方法がわからなくなります。更に、講義後の復習（検査練習）は必須です。				
履修主題・履修内容	回	履修主題	履修内容		
	1	成人言語聴覚療法とは	標準失語症検査（SLTA）について		
	2	標準失語症検査、（SLTA）	話す・聴く・読む・書く・計算の言語モダリティーの評価技法を学ぶ		
	3	標準失語症検査、（SLTA）	話す・聴く・読む・書く・計算の言語モダリティーの評価技法を学ぶ		
	4	標準失語症検査、（SLTA）	話す・聴く・読む・書く・計算の言語モダリティーの評価技法を学ぶ		
	5	標準失語症検査、（SLTA）	話す・聴く・読む・書く・計算の言語モダリティーの評価技法を学ぶ		
	6	標準失語症検査、（SLTA）	話す・聴く・読む・書く・計算の言語モダリティーの評価技法を学ぶ		
	7	標準失語症検査、（SLTA）	話す・聴く・読む・書く・計算の言語モダリティーの評価技法を学ぶ		
	8	標準失語症検査、（SLTA）	話す・聴く・読む・書く・計算の言語モダリティーの評価技法を学ぶ		
	9	標準失語症検査、（SLTA）	話す・聴く・読む・書く・計算の言語モダリティーの評価技法を学ぶ		
	10	標準失語症検査、（SLTA）	話す・聴く・読む・書く・計算の言語モダリティーの評価技法を学ぶ		
	11	標準失語症検査、（SLTA）	話す・聴く・読む・書く・計算の言語モダリティーの評価技法を学ぶ		
	12	標準失語症検査、（SLTA）	話す・聴く・読む・書く・計算の言語モダリティーの評価技法を学ぶ		
	13	SLTA 報告書	結果の分析、基本的な文章の組み立て方		
	14	SLTA 報告書	結果の分析、基本的な文章の組み立て方		
15	SLTA 報告書	結果の分析、基本的な文章の組み立て方			

授業科目	心理学	担当教員	阿部 純一		
対象年次・学期	1年・前期	必修・選択区分	必修	単位数	
授業形態		授業回数	15回	時間数	30時間
授業目的	言語聴覚士国家試験の出題範囲である心理学における土台となる心理学を学び、基礎知識の理解を深める。				
到達目標	1 心理学とはどのような学問なのかを理解し、説明することができる。 2 心を理解するための科学的な方法について理解し、説明することができる。 3 心と行動をつなぐ生理的基盤の基礎知識について理解し、説明することができる。 4 基礎科学的な心理学と応用的な心理学の違いを理解し、説明することができる。				
テキスト・参考図書等	教科書： 言語聴覚士のための心理学 第2版 山田弘幸・編 医歯薬出版 参考図書： マイヤーズ心理学 D. マイヤーズ・著 西村書店				
評価方法・評価基準	評価方法	評価割合(%)	評価基準		
	試験	100	定期試験で評価する。		
	レポート	0			
	小テスト	0			
	提出物	0			
その他	0				
履修上の留意事項	テキストと配布資料をもとに以下のスケジュールで授業を進めが、全体の進行状態に応じてスケジュール等を変更する場合もある。				
履修主題・履修内容	回	履修主題	履修内容		
	1	心理学とは	授業のガイダンス、心理学とは何か		
	2	心理学とは	心理学の歴史、心の測り方とその方法		
	3	感覚①	感覚とは何か、五感の仕組み、感覚モダリティについて		
	4	感覚②	感覚の感度、感覚における物理量と心理量との対応関係とその主要な法則について		
	5	感覚間の相互関連	感覚間の処理や順応の違いについて		
	6	知覚	知覚のしくみ、色々な錯視について		
	7	知覚と認知①	知覚されたものをどのように認知しているか__モデルやメカニズム		
	8	知覚と認知②	知覚されたものをどのように認知しているか__様々なタイプの認知		
	9	モチベーション（動機付け）	動因、誘因、生理的欲求、社会的欲求について		
	10	感情・情動	感情・情動とは何か		
	11	心と脳①	心と行動の生理的基盤について		
	12	心と脳②	中枢神経や抹消神経の仕組みについて		
	13	意識・注意	人の意識はどのようなモデルによって説明されるのか、注意とは何か		
	14	性格、心理学の応用	人の性格の類型論的あるいは特性論的な考え方について、臨床心理学、教育心理学等の応用的な心理学について		
15	まとめ	講義全体を通したまとめ			

授業科目	神経系の構造・機能・病態	担当教員	飯島 治之		
対象年次・学期	1年・後期	必修・選択区分	必修	単位数	
授業形態		授業回数	10回	時間数	20時間
授業目的	脳・神経系の機能解剖を学ぶ。				
到達目標	脳・神経系の機能解剖に関連付けて、神経症候学、高次脳機能障害といった病態を理解する。				
テキスト・参考図書等	(教) ぜんぶわかる脳の事典 著者名：坂井建雄、久光正 発行所：成美堂出版				
評価方法・評価基準	評価方法	評価割合(%)	評価基準		
	試験	100	定期試験にて評価を行う		
	レポート	0			
	小テスト	0			
	提出物	0			
その他	0				
履修上の留意事項	欠席せず、予習復習をすること。				
履修主題・履修内容	回	履修主題	履修内容		
	1	神経系の概要と基本構造 大脳の外形	神経伝達、イオンチャンネル、シナプス 大脳皮質の構造、白質		
	2	大脳の内部構造 大脳の機能中枢	海馬、扁桃体 大脳辺縁系の機能		
	3	間脳(視床と視床下部) 脳幹	大脳基底核の構造と機能 視床、自律神経系		
	4	小脳と脊髄 脳膜と脳室	延髄、橋、中脳、脳神経 脳幹病変		
	5	伝導路(下行路)	伝導路(下行路)		
	6	伝導路(上行路)	伝導路(上行路)		
	7	脳の血管系	脳の動脈・静脈、脊髄の血流支配		
	8	まとめ	神経生理、脳波、脳磁図		
	9	画像診断①	CT、MRI、fMRI、NIRS		
10	画像診断②	SPECT、アンギオ、エコー			

授業科目	生涯発達心理学		担当教員	山縣 豊樹	
対象年次・学期	1年・前期		必修・選択区分	必修	単位数
授業形態			授業回数	20回	時間数 40時間
授業目的	本講義では、発達にかんする研究などを紹介し、ともにこのテーマについて考察することを目的とする。発達とは、「生まれてから大人になるまで」の過程だけでなく、母体に宿ってから死ぬまでの、まさに生涯をつうじた変化であるととらえることができる。この壮大な変化の過程に、研究の視点からふれてみたい。				
到達目標	発達過程にかんする研究知見に触れることで、発達にかかわる諸問題や人間の「こころ」について、自身で考えを深める能力・技術を養う。				
テキスト・参考図書等	【テキスト】なし。 【参考図書】ベーシック発達心理学 著者：開一夫 齋藤慈子 編 発行所：東京大学出版 など（講義内容に沿って、適宜、関連書籍を紹介する予定）。				
評価方法・評価基準	評価方法	評価割合(%)	評価基準		
	試験	90	定期試験・小テストを合わせて評価する。		
	レポート	0			
	小テスト	10			
	提出物	0			
その他	0				
履修上の留意事項	基本的に予習は必要としない。ただし、受講に際する注意事項として、以下に記載した各回の履修内容は、進度等に応じて適宜変更を加える可能性があることを伝えておく。したがって、それぞれの講義ごとに内容を覚えようとするだけでなく、全体的な「流れ」をつかむように意識して受講してもらいたい。				
履修主題・履修内容	回	履修主題	履修内容		
	1	生涯発達心理学について	本講義のガイダンスを行なうとともに、導入として、生涯発達心理学における基礎的な考え方を概説する。		
	2	生涯発達心理学を学ぶための基礎	生涯発達心理学を学ぶ上で基礎となる知識（心理学についてや、その研究手法、遺伝・環境についての議論、学習の理論、など）を紹介していく。		
	3	生涯発達心理学を学ぶための基礎	生涯発達心理学を学ぶ上で基礎となる知識（心理学についてや、その研究手法、遺伝・環境についての議論、学習の理論、など）を紹介していく。		
	4	生涯発達心理学を学ぶための基礎	生涯発達心理学を学ぶ上で基礎となる知識（心理学についてや、その研究手法、遺伝・環境についての議論、学習の理論、など）を紹介していく。		
	5	生涯発達心理学を学ぶための基礎	生涯発達心理学を学ぶ上で基礎となる知識（心理学についてや、その研究手法、遺伝・環境についての議論、学習の理論、など）を紹介していく。		
	6	生涯発達心理学を学ぶための基礎	生涯発達心理学を学ぶ上で基礎となる知識（心理学についてや、その研究手法、遺伝・環境についての議論、学習の理論、など）を紹介していく。		
	7	生涯発達心理学を学ぶための基礎	生涯発達心理学を学ぶ上で基礎となる知識（心理学についてや、その研究手法、遺伝・環境についての議論、学習の理論、など）を紹介していく。		
	8	生涯発達心理学を学ぶための基礎	生涯発達心理学を学ぶ上で基礎となる知識（心理学についてや、その研究手法、遺伝・環境についての議論、学習の理論、など）を紹介していく。		
	9	生涯発達という発達観、および成人期・老年期	生涯発達という考え方を復習・補足し、あわせて、成人期以降の変化やその特徴をまず概観する。		
	10	生涯発達という発達観、および成人期・老年期	生涯発達という考え方を復習・補足し、あわせて、成人期以降の変化やその特徴をまず概観する。		
	11	胎児期・周産期・乳幼児期・児童期	胎児期～児童期までの変化と各段階の特徴について、いくつかの重要なトピック（運動、感覚、認知、愛着、社会性、など）ごとに、比較的詳細に紹介する。		
	12	胎児期・周産期・乳幼児期・児童期	胎児期～児童期までの変化と各段階の特徴について、いくつかの重要なトピック（運動、感覚、認知、愛着、社会性、など）ごとに、比較的詳細に紹介する。		
13	胎児期・周産期・乳幼児	胎児期～児童期までの変化と各段階の特徴について、いく			

	期・児童期	つかの重要なトピック（運動、感覚、認知、愛着、社会性、など）ごとに、比較的詳細に紹介する。
14	胎児期・周産期・乳幼児期・児童期	胎児期～児童期までの変化と各段階の特徴について、いくつかの重要なトピック（運動、感覚、認知、愛着、社会性、など）ごとに、比較的詳細に紹介する。
15	胎児期・周産期・乳幼児期・児童期	胎児期～児童期までの変化と各段階の特徴について、いくつかの重要なトピック（運動、感覚、認知、愛着、社会性、など）ごとに、比較的詳細に紹介する。
16	胎児期・周産期・乳幼児期・児童期	胎児期～児童期までの変化と各段階の特徴について、いくつかの重要なトピック（運動、感覚、認知、愛着、社会性、など）ごとに、比較的詳細に紹介する。
17	胎児期・周産期・乳幼児期・児童期	胎児期～児童期までの変化と各段階の特徴について、いくつかの重要なトピック（運動、感覚、認知、愛着、社会性、など）ごとに、比較的詳細に紹介する。
18	胎児期・周産期・乳幼児期・児童期	胎児期～児童期までの変化と各段階の特徴について、いくつかの重要なトピック（運動、感覚、認知、愛着、社会性、など）ごとに、比較的詳細に紹介する。
19	胎児期・周産期・乳幼児期・児童期	胎児期～児童期までの変化と各段階の特徴について、いくつかの重要なトピック（運動、感覚、認知、愛着、社会性、など）ごとに、比較的詳細に紹介する。
20	まとめ（および、補足・発展）	各発達期について確認・復習する。必要や状況に応じて、補足的あるいは発展的な内容を扱う。

授業科目	生理学		担当教員	鈴木 裕子		
対象年次・学期	1年・前期		必修・選択区分	必修	単位数	
授業形態			授業回数	15回	時間数	30時間
授業目的	医療人として土台となる体の構造や機能について学ぶ。					
到達目標	言語聴覚士の専門性の基本となる人体各部位の機能と働きについて理解し、医学的基礎知識を身につける。					
テキスト・参考図書等	(教) 言語聴覚士のための解剖生理学 著者名：小林靖 発行所：医歯薬出版 (参) 人体の構造と機能 著者名：内田さえ、佐伯由香、原田玲子 発行所：医歯薬出版 シンプル解剖生理学 著者名：河田光博、樋口隆 発行所：南江堂					
評価方法・評価基準	評価方法	評価割合(%)	評価基準			
	試験	90	定期試験と小テスト・提出物を合わせて評価する。			
	レポート	0				
	小テスト	5				
	提出物	5				
	その他	0				
履修上の留意事項	生理学は臨床につながる重要な基礎科目です。常に復習を行うこと。					
履修主題・履修内容	回	履修主題	履修内容			
	1	からだの構造と機能の基本	細胞の構造と細胞膜の生理を学び、細胞の興奮と活動電位、運動単位、筋収縮の概略を理解する。また組織とその働きの基本を理解する。			
	2	からだの構造と機能の基本	細胞の構造と細胞膜の生理を学び、細胞の興奮と活動電位、運動単位、筋収縮の概略を理解する。また組織とその働きの基本を理解する。			
	3	循環	心臓の機能、血液循環、循環系の調節、血圧について理解する。			
	4	血液	血液の作用、血液の成分、血液の凝固、血液型について理解する。			
	5	免疫	白血球と免疫機構について学ぶ。			
	6	呼吸	呼吸調節、呼吸運動、肺気量と換気、血液ガスについて学ぶ。			
	7	嚥下、消化と吸収	消化器系における嚥下機構、消化、吸収の仕組みを知る。栄養の代謝を学ぶ。			
	8	嚥下、消化と吸収	消化器系における嚥下機構、消化、吸収の仕組みを知る。栄養の代謝を学ぶ。			
	9	体液調節と尿排泄	腎臓における体液調節、尿の生成と排泄を理解する。			
	10	生殖	男性生殖器と女性生殖器の働きを学ぶ。個体発生の概略を理解する。			
	11	内分泌	ホルモンの種類と働きを学ぶ。			
	12	感覚	感覚器系（視覚、聴覚、平衡感覚、味覚、嗅覚、皮膚感覚、深部感覚）の働きを学ぶ。			
	13	感覚	感覚器系（視覚、聴覚、平衡感覚、味覚、嗅覚、皮膚感覚、深部感覚）の働きを学ぶ。			
	14	神経	神経細胞の興奮と伝達を理解する。脳の基本構造を理解し、運動の調節に関わる中枢（脊髄、脳幹、小脳、大脳基底核）の概略と末梢の関係を学ぶ。			
	15	神経	睡眠と覚醒、意識について理解しそれらと脳波の関連を知る。記憶と学習の仕組みを理解する。自律神経の作用を理解する。			

授業科目	摂食嚥下障害Ⅰ		担当教員	松山 大輔	
対象年次・学期	1年・後期		必修・選択区分	必修	単位数
授業形態			授業回数	15回	時間数 30時間
授業目的	摂食嚥下障害に関する基本的概念を学ぶ。基礎知識や理論を学び、理解する				
到達目標	<ul style="list-style-type: none"> ・摂食嚥下に関与する神経、筋を含む構造を理解できる ・摂食嚥下モデルを説明できる ・摂食嚥下障害の原因疾患や病態を説明できる 				
テキスト・参考図書等	(教) 脳卒中の摂食嚥下障害 第3版 著者名：藤島一郎 谷口洋 発行所：医歯薬出版 (教) 嚥下障害ポケットマニュアル 第4版 著者名：聖隷嚥下チーム 発行所：医歯薬出版				
評価方法・評価基準	評価方法	評価割合(%)	評価基準		
	試験	80	定期試験と小テストの結果から評価する		
	レポート	0			
	小テスト	20			
	提出物	0			
	その他	0			
履修上の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・配布プリントおよび教科書の予習復習をすること ・アクティブラーニングの一環としてグループワークを取り入れる。積極的に参加すること 				
履修主題・履修内容	回	履修主題	履修内容		
	1	摂食嚥下障害とはなにか	オリエンテーション、摂食嚥下の定義		
	2	嚥下のメカニズムについて	嚥下器官の解剖		
	3	嚥下のメカニズムについて	嚥下の5期モデル、プロセスモデル		
	4	嚥下のメカニズムについて	嚥下に関与する筋(1)		
	5	嚥下のメカニズムについて	嚥下に関与する筋(2)		
	6	嚥下のメカニズムについて	嚥下に関与する神経、グループワーク		
	7	嚥下のメカニズムについて	咽喉頭感覚、嚥下中枢、大脳の関与		
	8	摂食嚥下障害の原因	摂食嚥下障害の原因疾患・責任病巣(1)		
	9	摂食嚥下障害の原因	摂食嚥下障害の原因疾患・責任病巣(2)、グループワーク		
	10	障害のとらえ方とリハビリテーション	障害の考え方とICFについて		
	11	障害のとらえ方とリハビリテーション	評価とリハビリテーションの考え方		
	12	嚥下の年齢的变化	小児・成人・高齢者の嚥下		
	13	嚥下障害と呼吸器疾患	呼吸と嚥下 不顕性誤嚥と誤嚥性肺炎		
	14	嚥下障害と呼吸器疾患	呼吸器疾患からみた嚥下障害		
	15	老化と嚥下障害	栄養障害、フレイル		

授業科目	聴覚系の構造・機能・病態	担当教員	飯島 治之		
対象年次・学期	1年・後期	必修・選択区分	必修	単位数	
授業形態		授業回数	10回	時間数	20時間
授業目的	聴覚機能は人間のコミュニケーション能力に深くかかわっている。正常聴覚系の構造・機能について基本的なことを学び、関連する障害について理解を深める。				
到達目標	・聴覚系の正常構造をかけるようになる。 ・関連する病態について学び、難聴の機序について説明できるようになる。				
テキスト・参考図書等	教科書は特に指定しない。適宜資料を配布する。 ※宮田先生担当分 (教) New Simple Step 耳鼻咽喉科 総合医学社				
評価方法・評価基準	評価方法	評価割合(%)	評価基準		
	試験	100	定期試験にて評価を行う		
	レポート	0			
	小テスト	0			
	提出物	0			
その他	0				
履修上の留意事項	欠席せず、予習復習をすること。				
履修主題・履修内容	回	履修主題	履修内容		
	1	聴覚の概説	聴覚の概説		
	2	聴覚の概説	聴覚の概説		
	3	聴覚の解剖	聴覚器の比較解剖 外耳および中耳		
	4	聴覚の解剖	内耳（聴覚器） 内耳（平衡感覚器）		
	5	聴覚の解剖	聴覚路・聴覚中枢 平衡感覚路と平衡感覚中枢		
	6	聴覚の解剖	平衡覚と姿勢制御 聴覚器の発生 聴覚器の微細構造		
	7	聴覚系の病態と機能	外耳疾患・中耳疾患		
	8	聴覚系の病態と機能	内耳疾患・人工内耳		
	9	聴覚系の病態と機能	耳鳴り		
10	聴覚系の病態と機能	後迷路性・中枢疾患			

授業科目	聴覚検査法Ⅰ	担当教員	岡崎 聡子		
対象年次・学期	1年・後期	必修・選択区分	必修	単位数	
授業形態		授業回数	15回	時間数	30時間
授業目的	言語聴覚士が実施する代表的な検査の、目的・手順を学び、結果の分析を通して、聴覚障害の有無、タイプとの関係などの理解を深める。聴覚機能の鑑別診断に必要な評価法（自覚的、他覚的、乳幼児）を習得する。				
到達目標	・聴覚検査の臨床的な意義を知る・標準純音聴力検査の手順について学び実践できる ・インピーダンスオージオメトリについて手順を学び実施できる				
テキスト・参考図書等	(教) 聴覚検査の実際 第4版 南山堂				
評価方法・評価基準	評価方法	評価割合(%)	評価基準		
	試験	70	・実技試験と小テストにて評価		
	レポート	0			
	小テスト	30			
	提出物	0			
その他	0				
履修上の留意事項	聴覚検査は、単に聞こえるか聞こえないかの判断だけではなく、多くのことがわかる。検査に慣れると面白さがわかるので積極的に検査機器に触れること。				
履修主題・履修内容	回	履修主題	履修内容		
	1	聴覚検査の予備知識	検査をするにあたっての心構え、オージオメーターの取り扱い		
	2	純音聴力検査	標準純音聴力検査の目的、気導聴力検査		
	3	純音聴力検査	オージオグラムの形式、読み方		
	4	純音聴力検査	気導聴力検査		
	5	純音聴力検査	気導聴力検査		
	6	純音聴力検査	気導聴力とマスキング		
	7	純音聴力検査	骨導聴力検査		
	8	純音聴力検査	骨導聴力とマスキング		
	9	インピーダンスオージオメトリ	オージオメトリの目的、臨床的応用		
	10	インピーダンスオージオメトリ	ティンパノメトリの準備と手順		
	11	インピーダンスオージオメトリ	耳小骨筋反射検査の準備と手順		
	12	インピーダンスオージオメトリ	検査結果の判定		
	13	耳管機能検査	原理と方法		
	14	耳鳴検査	耳鳴の機序、検査の手順		
15	選別聴力検査	乳幼児、児童、成人の選別検査について			

授業科目	聴覚障害Ⅰ	担当教員	佐々木 勇輝		
対象年次・学期	1年・通年	必修・選択区分	必修	単位数	
授業形態		授業回数	20回	時間数	40時間
授業目的	「きこえる」とはどういうことかを考え、成人聴覚障害を対象とした臨床活動について理解を深める。				
到達目標	<ul style="list-style-type: none"> ・聴覚障害について理解し、その種類と特性に応じた検査 ・評価・訓練の基礎を学ぶ。 ・聴覚障害者のコミュニケーション指導・支援方法を理解する。 				
テキスト・参考図書等	(教) 聴覚障害学 第3版 発行所：医学書院				
評価方法・評価基準	評価方法	評価割合(%)	評価基準		
	試験	80	定期試験と小テストで評価する。		
	レポート	0			
	小テスト	20			
	提出物	0			
その他	0				
履修上の留意事項	欠席せず、教科書および授業で配布された資料、授業のメモに基づき理解を深めること。授業で実施する国家試験形式問題に慣れること。				
履修主題・履修内容	回	履修主題	履修内容		
	1	聴覚障害について学ぶ	オリエンテーション、音とはなにか、「きこえる」ということ		
	2	聴覚系の構造を学ぶ	伝音系（外耳・中耳）の解剖と機能		
	3	聴覚系の構造を学ぶ	伝音系（外耳・中耳）の解剖と機能		
	4	聴覚系の構造を学ぶ	感音系（内耳）・聴覚伝導路の構造と機能		
	5	聴覚系の構造を学ぶ	感音系（内耳）・聴覚伝導路の構造と機能		
	6	難聴の分類	伝音難聴、感音難聴、混合難聴		
	7	難聴と併発する症状	めまい、耳鳴、聴覚過敏、耳閉塞感、補充現象		
	8	難聴の原因疾患	難聴の原因と発症時期		
	9	難聴の原因疾患	難聴の原因と発症時期		
	10	成人聴覚障害	老人性難聴、後天的聴覚障害		
	11	聴覚検査の概要①	自覚的聴覚検査、他覚的聴覚検査		
	12	聴覚検査の概要①	自覚的聴覚検査、他覚的聴覚検査		
	13	聴覚検査の概要②	乳幼児聴力検査		
	14	聴覚補償機器	補聴器、人工聴覚機器、補助援助システム		
	15	聴覚補償機器	補聴器、人工聴覚機器、補助援助システム		
	16	成人聴覚障害のリハビリテーション①	成人聴覚障害の評価と訓練		
	17	成人聴覚障害のリハビリテーション①	成人聴覚障害の評価と訓練		
	18	成人聴覚障害のリハビリテーション②	コミュニケーション指導		
	19	情報保障と社会資源	情報保障、社会福祉制度		
20	まとめ	聴覚障害の概要、聴覚検査の概要、成人難聴のリハビリテーションの概要等			

授業科目	統計学	担当教員	島森 美光		
対象年次・学期	1年・後期	必修・選択区分	必修	単位数	
授業形態		授業回数	15回	時間数	30時間
授業目的	統計の基本的な考え方を理解し、データの取り扱い方法を修得する。				
到達目標	データを図表化し、その特徴を数値で表すことができる。基本的な推定や検定の方法を使うことができる。				
テキスト・参考図書等	(教)「やさしい統計学」、小林克彦監修、池田書店				
評価方法・評価基準	評価方法	評価割合(%)	評価基準		
	試験	50	定期試験、小テスト、提出物で総合的に評価		
	レポート	0			
	小テスト	20			
	提出物	30			
その他	0				
履修上の留意事項	ルート機能が付いた電卓があれば持参のこと。				
履修主題・履修内容	回	履修主題	履修内容		
	1	データの取り扱い	統計学の概要、代表値		
	2	データの記述	度数分布表とヒストグラム		
	3	データをばらつきを表す値(1)	散布度		
	4	データのばらつきを表す値(2)	正規分布、変動係数		
	5	データのばらつきを表す値(3)	箱ひげ図		
	6	データの特徴を図で表わす	グラフの種類と特徴		
	7	データの分類	尺度		
	8	二つのデータの関連性(1)	散布図と相関		
	9	二つのデータの関連性(2)	疑似相関		
	10	二つのデータの関連性(3)	エクセルを用いた相関係数の計算と図表の作成		
	11	推測統計学	記述統計学と推測統計学		
	12	推測統計学	点推定と区間推定		
	13	仮説検定	仮説検定の方法		
	14	仮説検定(2)	エクセルを用いた統計処理		
15	多変量解析	回帰直線と回帰係数			

授業科目	病理学	担当教員	菅原 直毅		
対象年次・学期	1年・前期	必修・選択区分	必修	単位数	
授業形態		授業回数	15回	時間数	30時間
授業目的	病理学の領域を把握して、疾病の原因とその成り立ちを理解する。				
到達目標	専門用語で疾病の基本的な病変の知識を獲得し、理解する。				
テキスト・参考図書等	(教) なるほどなっとく! 病理学 著: 小林正伸 発行所: 南山堂				
評価方法・評価基準	評価方法	評価割合(%)	評価基準		
	試験	100	講義終了後、国家試験形式で定期試験を実施する。 60点未満者は再試験を受けること。		
	レポート	0			
	小テスト	0			
	提出物	0			
その他	0				
履修上の留意事項	かなり難しい領域なので、集中して講義を受けること。パワーポイントで実施するので、配布資料は膨大になる。整理整頓を心がけること。				
履修主題・履修内容	回	履修主題	履修内容		
	1	病理学とは/疾病の原因	疾病発生には必ず原因がある。		
	2	病理学とは/疾病の原因	疾病発生には必ず原因がある。		
	3	細胞・細胞障害・再生	変性、萎縮、壊死、アポトーシスを理解する。		
	4	細胞・細胞障害・再生	変性、萎縮、壊死、アポトーシスを理解する。		
	5	循環障害	血液循環障害を理解する。		
	6	循環障害	血液循環障害を理解する。		
	7	代謝障害	円滑に進むことで恒常性は保たれる。		
	8	代謝障害	円滑に進むことで恒常性は保たれる。		
	9	炎症・免疫・免疫異常	炎症と免疫の関係を理解する		
	10	炎症・免疫・免疫異常	自然免疫と獲得免疫を理解する。		
	11	炎症・免疫・免疫異常	自然免疫と獲得免疫を理解する。		
	12	腫瘍	悪性腫瘍と良性腫瘍を理解する。		
	13	腫瘍	悪性腫瘍と良性腫瘍を理解する。		
	14	遺伝と先天異常	染色体異常疾患を理解する。		
15	遺伝と先天異常	遺伝形式を理解する。			

授業科目	保健体育Ⅰ		担当教員	大楽 敏夫	
対象年次・学期	1年・前期		必修・選択区分	必修	単位数
授業形態			授業回数	15回	時間数 30時間
授業目的	自分の健康と人々の健康のあり方について学ぶ。、スポーツをとおしてその意義と重要性を知るとともに、人とのコミュニケーション能力を養う。				
到達目標	健康の考え方の変化および食事の大切さや運動の必要性を理解するとともに、生活習慣病や感染症など現代の健康問題とその対策を学ぶ。スポーツをとおして心身の健康を維持・向上させるとともに、他者を思いやる心を養う				
テキスト・参考図書等	大修館現代高等保健体育				
評価方法・評価基準	評価方法	評価割合(%)	評価基準		
	試験	50	・定期試験 50%－解答率の評価 ・平常点 20% (レポート－内容・丁寧さ、小テスト－解答率の評価 (学習のまとめで実施)、提出物-期日日厳守) ・体育実技 30%-取り組み・姿勢・協調性など総合的に判断		
	レポート	20			
	小テスト	0			
	提出物	0			
その他	30				
履修上の留意事項	保健の講義は教室で行う。体育は北海道スポーツ専門学校の体育館を利用する。服装は運動に適した服装で参加する。				
履修主題・履修内容	回	履修主題	履修内容		
	1	オリエンテーション	1年生の保健体育の授業内容と授業の進め方及び留意事項の確認と生徒理解		
	2	私たちの健康のすがた	わが国の健康水準の向上の背景と健康問題の変化について		
	3	健康のとらえ方	健康についての多様な考え方と健康の成り立ちとその要因について		
	4	健康に関する環境づくり	健康づくりを支える環境の重要性とヘルスプロモーションの考え方にもとづく環境づくりについて		
	5	生活習慣病とその予防	生活習慣病とその予防と防止について		
	6	食事と健康	健康的な食生活の重要性と意義及び健康的な食生活の形成について		
	7	運動と健康	健康からみた運動の意義と健康づくりのための運動習慣の形成について		
	8	スポーツの実践(1)	準備運動・基礎運動(縄跳び・リズムステップ・その他)・筋力トレーニング バレーボール・バスケットボール・バドミントン・その他(練習及び試合)		
	9	スポーツの実践(2)	準備運動・基礎運動(縄跳び・リズムステップ・その他)・筋力トレーニング バレーボール・バスケットボール・バドミントン・その他(練習及び試合)		
	10	スポーツの実践(3)	準備運動・基礎運動(縄跳び・リズムステップ・その他)・筋力トレーニング バレーボール・バスケットボール・バドミントン・その他(練習及び試合)		
	11	スポーツの実践(4)	準備運動・基礎運動(縄跳び・リズムステップ・その他)・筋力トレーニング バレーボール・バスケットボール・バドミントン・その他(練習及び試合)		
	12	スポーツの実践(5)	準備運動・基礎運動(縄跳び・リズムステップ・その他)・筋力トレーニング バレーボール・バスケットボール・バドミントン・その他(練習及び試合)		
13	スポーツの実践(6)	準備運動・基礎運動(縄跳び・リズムステップ・その他)・筋力トレーニング バレーボール・バスケットボール・バドミントン・その他			

			(練習及び試合)
14	スポーツの実践 (7)	準備運動・基礎運動 (縄跳び・リズムステップ・その他)・筋力トレーニング バレーボール・バスケットボール・バドミントン・その他 (練習及び試合)	
15	スポーツの実践 (8)	準備運動・基礎運動 (縄跳び・リズムステップ・その他)・筋力トレーニング バレーボール・バスケットボール・バドミントン・その他 (練習及び試合)	

授業科目	保健体育 I	担当 教員 実務 経験	大楽敏夫 有：■ 無：□	道内高校で保健体育教諭として 40年以上勤務
対象年次・学期	1年・前期	担当 教員		
授業形態		実務 経験		
		担当 教員 実務 経験		

授業科目	臨床実習Ⅰ	担当教員	佐々木 勇輝		
対象年次・学期	1年・後期	必修・選択区分	必修	単位数	
授業形態		授業回数	20回	時間数	40時間
授業目的	臨床における言語聴覚療法を見学し言語聴覚士の職務や役割を理解する。				
到達目標	言語聴覚士の業務や役割、職務について理解する。				
テキスト・参考図書等	特に指定はしない				
評価方法・評価基準	評価方法	評価割合(%)	評価基準		
	試験		臨床教育者による評価と学科教員の評価を合わせて評価する。 評価項目(実習施設) 1. 医療者としての基本的態度の習得 2. STとなるために必要な医学的知識・障害像の理解や職業理解の習得 3. スタッフや患者様とのコミュニケーションスキルの向上 評価項目(学校) 1. 実習前準備 2. 提出物 3. 実習後の発表 実習施設 70%、学校 30% 200点満点中 120点以上を合格とする。		
	レポート				
	小テスト				
	提出物				
その他	100				
履修上の留意事項					
履修主題・履修内容	回	履修主題	履修内容		
	1		臨床における言語聴覚士の役割と立場を理解し、数種類の言語聴覚療法を見学及び体験する。 1. 積極的に参加する 2. 病院施設の業務等について学ぶ 3. 記録・報告について学ぶ 4. 見学による言語聴覚士の役割と職務の理解 5. 職業人としてのルールやマナーを学ぶ		

授業科目	リハビリテーション概論	担当教員	阿部 由美		
対象年次・学期	1年・前期	必修・選択区分	必須	単位数	
授業形態		授業回数	15回	時間数	30時間
授業目的	リハビリテーションと障害に関する理論を理解し、実際の教育・医療・福祉現場、および地域におけるリハビリテーションの進め方を学ぶ				
到達目標	教育・医療・福祉現場、および地域におけるリハビリテーションの役割、言語聴覚士の役割を理解する				
テキスト・参考図書等	(教) P T ・ O T ・ S T ・ ナースを目指す人のためのリハビリテーション総論 改訂第4版				
評価方法・評価基準	評価方法	評価割合(%)	評価基準		
	試験	90	定期試験、小テスト,提出物にて評価を行う		
	レポート	0			
	小テスト	10			
	提出物	10			
その他	0				
履修上の留意事項	言語聴覚療法はリハビリテーションの一領域である。リハビリテーションの概論に基づいてグローバルな視点で言語聴覚療法を組み立てる重要性について学ぶ				
履修主題・履修内容	回	履修主題	履修内容		
	1	リハビリテーションと機能訓練の違い	リハビリテーションの歴史・定義・目的について		
	2	医療・保健・社会福祉とリハビリテーションの関わり方	リハビリテーションの領域		
	3	リハビリテーションマインド	障害を診る心		
	4	疾患と障害の関係	ICIDHとICF (特にICIDHについて)		
	5	疾患と障害の関係	ICIDHとICF (特にICFについて)		
	6	疾患と障害の関係	ICIDHとICF (特にICFについて)		
	7	リハビリテーションの過程	リハビリテーションの領域		
	8	リハビリテーションの過程	評価に基づくプログラム立案を概観		
	9	リハビリテーションの過程	事例を通してICIDHを具体的に考える		
	10	リハビリテーションの過程	事例をと通してICFを具体的に考える		
	11	リハビリテーションの過程	事例をと通してICFを具体的に考える		
	12	医学的リハビリテーションの各段階	疾患別リハビリテーションの実際 (主に急性期)		
	13	医学的リハビリテーションの各段階	疾患別リハビリテーションの実際 (主に回復期)		
	14	医学的リハビリテーションの各段階	疾患別リハビリテーションの実際 (主に生活期)		
15	言語聴覚士のリハビリテーション	集団コミュニケーション療法について			

授業科目	リハビリテーション概論	担当 教員 実務 経験	阿部由美 有：■ 無：□	言語聴覚士として市内病院にて 14年、訪問看護ステーションに て4年勤務
対象年次・学期	1年・前期	担当 教員		
授業形態		実務 経験		
		担当 教員 実務 経験		

授業科目	医学総論	担当教員	菅原 直毅		
対象年次・学期	1年・後期	必修・選択区分	必修	単位数	
授業形態		授業回数	15回	時間数	30時間
授業目的	医学・医療を社会医学的な観点から理解する。				
到達目標	社会医学統計数値を理解する。				
テキスト・参考図書等	(参) わかりやすい公衆衛生学 著者名：清水忠彦 発行所：ヌーヴェルヒロカワ				
評価方法・評価基準	評価方法	評価割合(%)	評価基準		
	試験	100	講義終了後、国家試験に準じた定期試験を実施する。 60点未満者は再試験を受けること。		
	レポート	0			
	小テスト	0			
	提出物	0			
	その他	0			
履修上の留意事項	パワーポイントで実施するので、資料が膨大になる。整理整頓を要する。				
履修主題・履修内容	回	履修主題	履修内容		
	1	医の倫理、医療行為	医療行為とは		
	2	健康と疾病の予防	病気と健康とは何か		
	3	健康と疾病の予防	予防とスクリーニングを知る		
	4	人口統計	人口構造を知る		
	5	人口統計	人口構造を知る		
	6	疾病構造の現状	主要四死因を知る		
	7	悪性新生物と生活習慣	悪性新生物の罹患と死亡を知る		
	8	悪性新生物と生活習慣	悪性新生物の罹患と死亡を知る		
	9	医療制度と国民医療費	医療制度と医療費を知る		
	10	医療制度と国民医療費	医療制度と医療費を知る		
	11	感染症問題	感染症の現状を理解する		
	12	母子保健	母子保健に関する指標を理解する		
	13	環境	地域・地球環境の問題点を理解する		
	14	疫学統計	疫学とはどんな学問か		
15	疫学統計	疫学とはどんな学問か			

授業科目	医療倫理		担当教員	尾形 敬次	
対象年次・学期	1年・後期		必修・選択区分	必修	単位数
授業形態			授業回数	15回	時間数 30時間
授業目的	医療者が如何なる社会的文化的文脈の中で活動し、倫理的問題に出会うかを知り、それへの態度を作ること				
到達目標	医療者に相応しい社会的人格を作ること				
テキスト・参考図書等	使用しない。				
評価方法・評価基準	評価方法	評価割合(%)	評価基準		
	試験	50	この科目の性質上、知識だけではなく、むしろ医療者としての心構えが問題となる。そこで、授業時間内のそうした課題の考察結果を成績評価において重要視する。これと知識の確認という意味での期末試験とを総合して最終評価を下す。		
	レポート	0			
	小テスト	0			
	提出物	0			
その他	50				
履修上の留意事項	倫理学は知識ではなく心構えを作る学問である、積極的に考えることが望まれる。				
履修主題・履修内容	回	履修主題	履修内容		
	1	倫理学	倫理学とは何か		
	2	国家と国民	主権者とその責任		
	3	医療保障政策	民主主義国家と医療保障		
	4	医療保障政策	医療者の社会的地位		
	5	医療をめぐる状況	日本の医療保障とその現状		
	6	医療をめぐる状況	疾病構造の変化		
	7	医療をめぐる状況	高齢化社会と健康寿命		
	8	医療倫理学的問題	医師のパターナリズムと患者の自己決定権		
	9	医療倫理学的問題	アメリカの医療保障とインフォームドコンセント		
	10	医療倫理学的問題	日本文化とインフォームドコンセント		
	11	医療倫理学的問題	脳死臓器移植、希少資源配分の問題		
	12	医療倫理学的問題	代替臓器の開発をめぐる問題		
	13	医療倫理学的問題	終末期医療、尊厳死と安楽死		
	14	医療倫理学的問題	安楽死法と安楽死をめぐる問題		
15	医療倫理学的問題	医療者の倫理綱領と医療を巡る現状についての考察			

授業科目	英語Ⅰ	担当教員	板東 眞一		
対象年次・学期	1年・前期	必修・選択区分	必修	単位数	
授業形態		授業回数	15回	時間数	30時間
授業目的	英語Ⅰでは、英語によるコミュニケーションを図るための基本的な資質・能力を育成することを目的とする。				
到達目標	①平易な英語で話したり書いたりできる。②日常生活に関する平易な英文を読んだり聞いたりできる。③医療に関する基本的な専門用語を理解できる。				
テキスト・参考図書等	(教) LET'S MAKE IT SIMPLE! (レッツ・メイク・イット・シンプルーはじめての実践英語ー) 著者名 森田和子・高橋純子・北本洋子 発行所 三修社				
評価方法・評価基準	評価方法	評価割合(%)	評価基準		
	試験	50	①試験は学習内容の理解度を評価する。 ②提出物は学習内容に即したライティングの到達度を評価する。 ③その他は授業中のタスク(コミュニケーション活動)の到達度を評価する。		
	レポート	0			
	小テスト	0			
	提出物	20			
その他	30				
履修上の留意事項	医療の専門職を目指すものとして、真摯で意欲的な学習を期待する。				
履修主題・履修内容	回	履修主題	履修内容		
	1	My Family	形容詞、名詞、SVC、家族に関する表現		
	2	My Family	形容詞、名詞、SVC、家族に関する表現		
	3	Our Campus	前置詞、場所に関する表現		
	4	Our Campus	前置詞、場所に関する表現		
	5	Jobs and Workplaces	SVO、仕事に関する表現		
	6	Jobs and Workplaces	SVO、仕事に関する表現		
	7	Everyday Activities	人称代名詞、疑問文、否定文、日常生活に関する表現		
	8	Everyday Activities	人称代名詞、疑問文、否定文、日常生活に関する表現		
	9	Transportation	命令文、交通機関に関する表現		
	10	Transportation	命令文、交通機関に関する表現		
	11	Part-time Jobs	形容詞、数に関する表現		
	12	Part-time Jobs	形容詞、数に関する表現		
	13	Health & Illness	疑問詞(1)、健康や病気に関する表現		
	14	Health & Illness	疑問詞(1)、健康や病気に関する表現		
15	学習のまとめ	振り返り			

授業科目	英語Ⅱ	担当教員	板東 眞一		
対象年次・学期	1年・後期	必修・選択区分	必修	単位数	
授業形態		授業回数	15回	時間数	30時間
授業目的	英語Ⅱでは、英語によるコミュニケーションを図るための基本的な資質・能力を育成することを目的とする。				
到達目標	①平易な英語で話したり書いたりできる。②日常生活に関する平易な英文を読んだり聞いたりできる。				
テキスト・参考図書等	(教) LET'S MAKE IT SIMPLE! (レッツ・メイク・イット・シンプルーはじめての実践英語ー) 著者名 森田和子・高橋純子・北本洋子 発行所 三修社				
評価方法・評価基準	評価方法	評価割合(%)	評価基準		
	試験	50	①試験は学習内容の理解度を評価する。 ②提出物は学習内容に即したライティングの到達度を評価する。 ③その他は授業中のタスク(コミュニケーション活動)の到達度を評価する。		
	レポート	0			
	小テスト	0			
	提出物	15			
その他	35				
履修上の留意事項	医療の専門職を目指すものとして、真摯で意欲的な学習を期待する。				
履修主題・履修内容	回	履修主題	履修内容		
	1	Shopping	疑問詞(2)、買い物に関する表現		
	2	Shopping	疑問詞(2)、買い物に関する表現		
	3	Leisure	時制、時間に関する表現		
	4	Leisure	時制、時間に関する表現		
	5	College Life	助動詞、学校生活に関する表現		
	6	College Life	助動詞、学校生活に関する表現		
	7	Countries	比較、天候に関する表現		
	8	Countries	比較、天候に関する表現		
	9	Taking a Trip (1)	文構造・文法事項の復習(1)、海外旅行に関する表現		
	10	Taking a Trip (1)	文構造・文法事項の復習(1)、海外旅行に関する表現		
	11	Taking a Trip (2)	文構造・文法事項の復習(2)、海外旅行に関する表現		
	12	Taking a Trip (2)	文構造・文法事項の復習(2)、海外旅行に関する表現		
	13	Presentation	海外旅行プラン作成		
	14	Presentation	海外旅行プラン発表		
15	学習のまとめ	振り返り			

授業科目	音響学		担当教員	高橋 誠	
対象年次・学期	1年・前期		必修・選択区分	必修	単位数
授業形態			授業回数	15回	時間数 30時間
授業目的	私たちの身の回りは音で満ち溢れている。音は空気の振動という物理的現象であるとともに、情報を伝える信号でもある。この授業では、信号としての音の性質を学び、音がどのように情報を運ぶのか、音と言葉の関係について学ぶ。				
到達目標	<ul style="list-style-type: none"> ・音の物理的な特徴を簡単な実験及び理論で把握理解する ・音の分析とモデル化の基礎を学ぶ ・言語音の生成と知覚について理解する 				
テキスト・参考図書等	(教) ゼロからはじめる音響学 著者名：青木 直史 発行所：KS 理工学専門書 (参) 言語聴覚士の音響学入門 著者名：吉田 友敬 発行所：海文堂				
評価方法・評価基準	評価方法	評価割合(%)	評価基準		
	試験	85	定期試験と小テスト、提出物を合わせて(15%で)評価する。		
	レポート	0			
	小テスト	15			
	提出物	0			
その他	0				
履修上の留意事項	授業は基本的に液晶タブレットを用いた講義形式である。音響学の基礎知識をできるだけ複雑な数式を使わずに学ぶことを目的とした講義であるが、概念を理解するために必要な数学が扱われる。				
履修主題・履修内容	回	履修主題	履修内容		
	1	オリエンテーション	授業の目標と全体の流れを説明し、音波の基本的性質(波長、周期、周波数、振幅、位相)を学ぶ。様々な音の種類(純音、高調波、音声)について概観する。		
	2	オリエンテーション	授業の目標と全体の流れを説明し、音波の基本的性質(波長、周期、周波数、振幅、位相)を学ぶ。様々な音の種類(純音、高調波、音声)について概観する。		
	3	および音の物理的な特徴	伝播、反射、干渉、屈折など、音波の振る舞いについて理解する		
	4	音の周波数特性 音圧と音の強さ	デシベルを中心として音の物理的・感覚的な強さや大きさについて解説する。音圧と音の強さの関係について説明し、デシベルの元になる対数についても簡単に勉強しておく学習する。		
	5	音のスペクトル	音の単音成分を表すスペクトルについて学ぶ。スペクトル傾斜、包絡、フーリエ変換、サウンドスペクトログラムなどを概観する。		
	6	音のスペクトル	音の単音成分を表すスペクトルについて学ぶ。スペクトル傾斜、包絡、フーリエ変換、サウンドスペクトログラムなどを概観する。		
	7	伝達関数	音声の生成過程におけるフィルタの役割を理解した上でそれとつながる伝達関数や極と零の概念に取り組む。		
	8	音のデジタル信号処理	どのように音をデジタルデータとして扱うかを学ぶ。標本化と量子化の違いを理解する。		
	9	音声生成の音響理論	音源フィルタ理論を考察する。この理論を用いて音声の共鳴というフィルタ作用がどのように言語音の音響特性の生み出すことを学ぶ。		
	10	日本語音声の音響的な特徴	日本語で使われる母音・子音の音響特性の理解を深める。母音とフォルマント、鼻音とアンチフォルマント、子音とフォルマント遷移について学ぶ。		
	11	聴覚	聴覚を音響的な観点から見て、聴覚フィルタとマスキングについて概観する。		
	12	知覚と認識	ヒトがどのように音の強さ・大きさと・高さ、音源位置同定を判断することかを学ぶ。日本語の文節音言語音声や談話を音響的な文節要素(アクセント・イントネーションなど)の知覚についても考察する。		
13	知覚と認識	ヒトがどのように音の強さ・大きさと・高さ、音源位置同定を判断することかを学ぶ。日本語の文節音言語音声や談話を判断することかを学ぶ。日本語の文節音言語音声や談話を			

			を音響的な文節要素（アクセント・イントネーションなど）の知覚についても考察する。
14	音声の音響分析		言語音声や談話を音響的な分析する方法を習う。
15	音声の音響分析		言語音声や談話を音響的な分析する方法を習う。

授業科目	音声学Ⅰ		担当教員	山田 敦士	
対象年次・学期	1年・前期		必修・選択区分	必修	単位数
授業形態			授業回数	15回	時間数 30時間
授業目的	一般音声学に関する知識、分析方法を教授する				
到達目標	一般音声学に関する知識を身につけ、日本語音声に対する考察ができるようになる				
テキスト・参考図書等	大森孝一他編（2018）『言語聴覚士テキスト第3版』医歯薬出版				
評価方法・評価基準	評価方法	評価割合(%)	評価基準		
	試験	60	期末試験、小テスト（3回実施の予定）、演習への取り組みを合わせて評価する。		
	レポート	0			
	小テスト	30			
	提出物	0			
その他	10				
履修上の留意事項	授業進行状況によって内容変更がありえる。配布資料も併用。				
履修主題・履修内容	回	履修主題	履修内容		
	1	ガイダンス	音声学の射程を知る		
	2	音声学の位置づけ	音声学と音韻論		
	3	音声の分類（1）	調音器官		
	4	音声の分類（2）	調音運動の観察		
	5	第1～5回のまとめと復習	調音器官の復習		
	6	音声の分類（3）	IPA		
	7	音声の分類（4）	母音と子音		
	8	音声の分類（5）	子音の分類		
	9	音声の分類（6）	母音の分類		
	10	第6～9回のまとめと復習	IPAの復習		
	11	音の結びつき（1）	音節		
	12	音の結びつき（2）	調音結合と同化		
	13	音の結びつき（3）	音位転換		
	14	音表文字と音声表記	音と文字の関係		
15	第11～14回のまとめと復習	音の結びつき、音表文字と音声表記の復習			

授業科目	音声学Ⅱ		担当教員	山田 敦士	
対象年次・学期	1年・後期		必修・選択区分	必修	単位数
授業形態			授業回数	15回	時間数 30時間
授業目的	一般音声学に関する知識、分析方法を教授する				
到達目標	一般音声学に関する知識を身につけ、日本語音声に対する考察ができるようになる				
テキスト・参考図書等	大森孝一他編（2018）『言語聴覚士テキスト第3版』医歯薬出版				
評価方法・評価基準	評価方法	評価割合(%)	評価基準		
	試験	60	期末試験、小テスト（3回実施の予定）、演習への取り組み(評価基準；3.主体的に適切な応答ができる 2.受け身ではあるが適切な応答ができる 1.応答できない)を合わせて評価する。		
	レポート	0			
	小テスト	30			
	提出物	0			
その他	10				
履修上の留意事項	授業進行状況によって内容変更がありえる。配布資料も併用。				
履修主題・履修内容	回	履修主題	履修内容		
	1	前期のおさらい	前期学習内容のおさらい		
	2	超分節的要素（1）	イントネーション		
	3	超分節的要素（2）	アクセント		
	4	超分節的要素（3）	リズム		
	5	第2～4回のまとめと復習	超分節的要素の復習		
	6	音韻論（1）	弁別素性		
	7	音韻論（2）	音韻規則		
	8	音韻論（3）	音節とモーラ		
	9	日本語の音声（1）	日本語の音素体系、モーラ音素		
	10	第6～9回のまとめと復習	音韻論の復習		
	11	日本語の音声（2）	日本語の母音音声		
	12	日本語の音声（3）	日本語の子音音声		
	13	日本語の音声（4）	アクセント		
	14	日本語の音声（5）	アクセント		
15	第11～14回のまとめと復習	日本語の音声の復習			

授業科目	解剖学	担当教員	飯島 治之		
対象年次・学期	1年・前期	必修・選択区分	必修	単位数	
授業形態		授業回数	15回	時間数	30時間
授業目的	人体の構造と機能を理解することは医学を学ぶための基礎である。 言語聴覚にかかわる分野だけでなく、全身を広く学び、からだ全体のつながりを知ることが目的である。				
到達目標	<ul style="list-style-type: none"> 全身の骨・関節・靭帯・筋およびその詳細について学習し、基礎的知識を身につける。 基本的な解剖学の名称と各器官の関連性、および人体に於ける3次元的位置関係について理解する。 				
テキスト・参考図書等	(教) 言語聴覚士のための解剖・生理学 著者名：小林靖 発行所：医歯薬出版 (教) ナースのための解剖生理ポケットブック 著者名：飯島治之 発行所：技術論評社				
評価方法・評価基準	評価方法	評価割合(%)	評価基準		
	試験	100	定期試験にて評価を行う。		
	レポート	0			
	小テスト	0			
	提出物	0			
その他	0				
履修上の留意事項	学習内容が広範に渡る上に授業進度がはやいので、しっかり復習すること。				
履修主題・履修内容	回	履修主題	履修内容		
	1	解剖学の概要	解剖学とは、人体の構成		
	2	運動器系	骨の構造、全身の骨格、筋の構造、全身の筋		
	3	運動器系	骨の構造、全身の骨格、筋の構造、全身の筋		
	4	循環器系	心臓と血管、リンパ系		
	5	循環器系	心臓と血管、リンパ系		
	6	呼吸器系	気道と肺、胸腔		
	7	呼吸器系	気道と肺、胸腔		
	8	消化器系	消化管と消火腺、腹腔と腹膜		
	9	泌尿生殖器系	腎臓と尿路、男子生殖器、女性生殖器		
	10	神経系Ⅰ	中枢神経系（脳と脊髄）		
	11	神経系Ⅰ	中枢神経系（脳と脊髄）		
	12	神経系Ⅱ	末梢神経系（体性神経と自律神経）		
	13	内分泌系	内分泌線とホルモン		
	14	感覚器系	視覚器、聴覚器、その他の感覚		
15	感覚器系	視覚器、聴覚器、その他の感覚			

授業科目	学習心理学		担当教員	笠井 有利子	
対象年次・学期	1年・後期		必修・選択区分	必修	単位数
授業形態			授業回数	15回	時間数 30時間
授業目的	言語聴覚士国家試験出題基準にある「認知・学習心理学」の内容範囲を、本科目「学習心理学」と別科目「認知心理学」とで連続的に学ぶ。				
到達目標	人間の心的機能には、大きく分けて知・情・意の三つの側面がある。その中の知(cognition(認知))の側面について、本「学習心理学」と「認知心理学」の両科目で学ぶ。すなわち、感覚、知覚、記憶、学習、思考、言語などの認知機能の特徴とメカニズムについて学ぶ。				
テキスト・参考図書等	教科書：『言語聴覚士のための心理学 第2版』編集：山田弘幸 発行所：医歯薬出版株式会社 参考図書：『マイヤーズ心理学』著者名：D. マイヤーズ 発行所：西村書店 参考図書：『ヒルガードの心理学・第16版』著者名：S. ノーレン-ホークセマ、他 発行所：金剛出版 参考図書：『いちばんはじめに読む心理学の本4 認知心理学』編著：仲真紀子 発行所：ミネルヴァ書房				
評価方法・評価基準	評価方法	評価割合(%)	評価基準		
	試験	70	定期試験と提出物を合わせて評価する。		
	レポート	0			
	小テスト	30			
	提出物	0			
その他	0				
履修上の留意事項	心理学とは、人間の心理と行動のメカニズムを解明し、合理的に説明しようとする科学である。その知見を学ぶ。				
履修主題・履修内容	回	履修主題	履修内容		
	1	認知心理学とは、認知とは、学習とは	心理学の中における認知心理学の位置づけ		
	2	感覚と知覚	外界のものを認知する知覚のプロセスと主要な感覚モダリティの概要(課題1)		
	3	主感覚(視・聴覚)のしくみと主要な生理基盤	主感覚である視・聴覚のしくみと脳の構造と主要機能		
	4	知覚の障害と脳の可塑性	DVD鑑賞：視覚の仕組みと脳の構造、脳の可塑性		
	5	色彩の知覚	色が見える仕組みと色覚の多様性(課題2)		
	6	心理物理学を中心とした心理測定法	心理物理学を中心とした心理測定法について		
	7	知覚の体制化①バラバラな感覚情報がまとまるための機能	注意と定位		
	8	知覚の体制化②バラバラな感覚情報がまとまるための機能	再認、抽象化、恒常性		
	9	知覚のゆがみ	認知のスキーマ依存性と錯視		
	10	記憶のしくみと思考	記憶の種類としくみおよび思考の認知バイアスについて		
	11	学習①動物の認知能力と人間の相対的理解	DVD鑑賞：言語が高度に発達した類人猿を視聴し、学習について遺伝と環境の影響を考察(課題3)		
	12	学習②観察学習	学習とパーソナリティ形成		
	13	学習③条件づけ	古典的条件づけとオペラント条件づけ		
	14	顔知覚と対人認知	顔知覚の特殊性、認知における感情の処理論から対人認知への応用		
15	全体の総括とまとめ	試験に向けて全体のまとめと対策			

授業科目	基礎生物物理		担当教員	近江谷 和彦	
対象年次・学期	1年・前期		必修・選択区分	必修	単位数
授業形態			授業回数	15回	時間数 30時間
授業目的	<p>【生物】 ヒトの体のつくりを理解する。 【物理】 医療に係る物理について理解する。</p>				
到達目標	<p>【生物】 DNAから組織までのヒトの体のつくりに加え、生物学の基本的な知識を習得する。 【物理】 私たちの生活には物理学により説明できる事象が沢山あり、医療・福祉の現場でも物理学に基づいた考えは欠くことができない。この授業では、物理学の基礎を学び、理解し、それぞれの分野で私たちの生活、医療・福祉との関連性を考える。また数式を理解し、物理量の計算もできるようにする。</p>				
テキスト・参考図書等	<p>【生物】 「生物学」 著者名：高畑 雅一ほか 発行所：医学書院 【物理】 医療系のための物理学入門 著者名：木下 順二 発行所：講談社</p>				
評価方法・評価基準	評価方法	評価割合(%)	評価基準		
	試験	生物	<p>【生物】 定期試験(100%)にて評価を行う。 【物理】 定期試験(70%)、レポート(30%)を合わせて評価を行う。</p>		
	レポート	0			
	小テスト	0			
	提出物	0			
その他	0				
履修上の留意事項	<p>【生物】 授業で分からなかった部分については、人に説明できるようになるまで復習をすること。 【物理】 前もって教科書を読んで授業をうけること。学んだことをその日中に思い起こすこと。疑問点が残ったら早めに解決すること。なお、数式、三角関数については予習しておくことが望ましい。</p>				
履修主題・履修内容	回	履修主題	履修内容		
	1	生物学入門	生物という学問・生物の一様性と多様性		
	2	細胞のつくりと働き	生物の構成要素と細胞内の構造・働き		
	3	生殖と発生	子孫を残す仕組み・生物の発生過程		
	4	遺伝情報	遺伝の法則・遺伝子の構造と細胞内での発現経路		
	5	神経系	生物の様々な神経系とその役割		
	6	生命の維持と調節	代謝によるエネルギー生産・筋肉組織・内分泌系		
	7	生命の起源と進化	進化とは・生命の歴史・ヒトの歴史		
	8	物理量と人体	はじめに、生活の中の物理学、物理量と人体		
	9	力と身体バランス	力のつり合い、力のモーメント、身体のバランス、骨		
	10	運動モデルとスポーツ	物体の運動、仕事とエネルギー、エネルギー保存則		
	11	熱とエネルギー代謝	熱、温度、熱・エネルギーと人体		
	12	圧力と循環・呼吸	圧力とは、圧力と流体と人体		
	13	音と聴覚・発声	波の基本的な性質、振動、音の性質、超音波		
	14	音と聴覚・発声	音の強さ、耳と聴覚、音を利用した機器		
15	電磁気の基礎、波と画像処理	電気とオームの法則、波の性質、音波と電磁波の性質			

授業科目	教育学		担当教員	菅原 和良	
対象年次・学期	1年・後期		必修・選択区分	必修	単位数
授業形態			授業回数	15回	時間数 30時間
授業目的	学校教育に関する社会的、制度的な事項について学ぶとともに、それらに関連する課題の解決について考えていく。				
到達目標	<ul style="list-style-type: none"> ・社会の状況を理解し、その変化が学校教育にもたらす影響とそこから生じる課題並びにそれに対応するための教育施策の動向を理解する。 ・学校教育を媒介とし、社会教育や家庭教育、職場における人間関係や協働的な関わりについて考察し、家庭や社会におけるリーダーシップの発揮の仕方やよりよき支援者としての資質・能力を育む。 ・講義を理解しながら自分で考え、発表し、積極的に授業参加して課題解決について考えることを通し、柔軟な思考や視点、社会の一員としての教育への関わり方などの態度や方法を身に付ける。 				
テキスト・参考図書等	(教) 問から始める教育学[改訂版]				
評価方法・評価基準	評価方法	評価割合(%)	評価基準		
	試験	50	授業では原則毎回課題発表を行うことから、個人の発表に対する取組やプレゼン、ディスカッション、グループ協議などの演習を試験と同等に評価する。		
	レポート	0			
	小テスト	0			
	提出物	0			
	その他	50			
履修上の留意事項	1.学生としての授業規律と積極的な授業参加を期待する。 2.病欠、諸事情で欠席の場合は事務担当者に必ず連絡すること。 3.コミュニケーションスキルを(挨拶・対話等)を身に付ける。4.授業への主体的・協働的参加を期待する。				
履修主題・履修内容	回	履修主題	履修内容		
	1	教育にまつわる経験・体験	それぞれの教育の<原風景>について		
	2	教育を社会の視点から考える	教育の意義と目的		
	3	子どもという存在/人間という存在	人間が「育つ」ということ		
	4	教育方法の歴史	「考え方」を探究した人々		
	5	教育を受ける権利	教育の機会均等		
	6	子どもの学びを支える仕組み	学習指導要領と検定教科書		
	7	身近な防災教育	いざという時慌てないために		
	8	学校の形成(1)	西洋における近代教育		
	9	学校の形成(2)	日本型の学校形成		
	10	よい先生・指導者	日本の教員養成制度		
	11	子どもとの接し方	教育的関係性の構築		
	12	自律的学習者の育成	情報化の進展と学校教育		
	13	学校卒業後の学習	生涯学習社会の到来と学びの再考		
	14	共生のための教育	マイノリティと学校教育		
15	これからの教育が目指すもの	これまでの学習の総括			

授業科目	現代表現	担当教員	秋田 松年		
対象年次・学期	1年・前期	必修・選択区分	必修	単位数	
授業形態		授業回数	15回	時間数	30時間
授業目的	「文章作法」や「意見文等の書き方や敬語の使用法」などの基礎・基本を習得させることにより、社会人として必要な常識などを身に付けさせる。				
到達目標	将来に必要な最低限の漢字の読み書き、敬語の使い方、文章の書き方（意見文・レポート・お礼文）等が身に付くようになる。				
テキスト・参考図書等	毎時間配布する資料に基づいて授業を行います。				
評価方法・評価基準	評価方法	評価割合(%)	評価基準		
	試験	70	定期試験、小テスト、提出物、発表等を総合して評価する。		
	レポート	20			
	小テスト	0			
	提出物	0			
	その他	10			
履修上の留意事項	将来を見通して、言葉遣い等の基礎・常識・知識等を身につけるための授業である。皆さんが将来、接する人たちに対してどのように対応していくべきかを考えながら、常に新たな気持ちで毎回、出席をすること。				
履修主題・履修内容	回	履修主題	履修内容		
	1	オリエンテーション	講義内容概説、書写等		
	2	文章の基礎 1	語彙力、文章力をつける 1、2		
	3	文章の基礎 2	語彙力、文章力をつける 3、4		
	4	文章の基礎 3	語彙力、文章力をつける 5、6		
	5	文章の基礎 4	語彙力、文章力をつける 7、8		
	6	文章の基礎 5	文の乱れ、文体の統一、話し言葉・書き言葉の違い等		
	7	文章の基礎 6	要約の仕方とその実際等		
	8	文章の基礎 7	意見文、レポートの書き方等		
	9	文章の基礎 8	敬語表現 1		
	10	文章の基礎 9	敬語表現 2		
	11	文章の基礎 10	敬語表現 3		
	12	文章の基礎 11	敬語表現 4		
	13	文章の基礎 12	敬語表現 5		
	14	文章の基礎 13	手紙の形式とマナー		
15	文章の基礎 14	手紙の形式とお礼文の書き方、授業のまとめ等			

授業科目	言語学 I		担当教員	中村 真衣佳	
対象年次・学期	1年・前期		必修・選択区分	必修	単位数
授業形態			授業回数	15回	時間数 30時間
授業目的	言語聴覚士に不可欠な言語学的知識・分析技術の定着を図る				
到達目標	言語学に関する基礎的知識を用い、言語聴覚士として必要な分析ができる				
テキスト・参考図書等	大森孝一他編 (2018)『言語聴覚士テキスト第3版』医歯薬出版				
評価方法・評価基準	評価方法	評価割合(%)	評価基準		
	試験	60	定期試験、小テスト (3回実施の予定)、演習活動における練習問題への回答数と合わせて評価する。		
	レポート	0			
	小テスト	30			
	提出物	0			
その他	10				
履修上の留意事項	授業進行状況によって内容変更がありえる。配布資料も併用。				
履修主題・履修内容	回	履修主題	履修内容		
	1	言語学とは	言語学が取り扱う範囲、言語学の目的、言語学の歴史 (概要)		
	2	言語学の基本的な性質 (1)	パロールとラング、通時態と共時態		
	3	言語学の基本的な性質 (2)	記号表現と記号内容、言語記号の恣意性と有契性		
	4	言語学の基本的な性質 (3)	二重分節、線状性、統合的関係と範列的關係		
	5	第1回～第4回のまとめと復習	言語学の範囲、ソシユールの概念、その他基本的概念		
	6	形態論 (1)	形態素、無標形と有標形、自由形態素と拘束形態素		
	7	形態論 (2)	形態論的プロセス (モノとしての形態素: 複合、接辞、重複)		
	8	形態論 (3)	形態論的プロセス (ルールとしての形態素: 母音変換、子音変換、短縮ルール: 混成語、刈り込み、頭字語)		
	9	形態論 (4)	補充法と転換、異形態、連濁、派生文法と日本語文法		
	10	第6回～第9回のまとめと復習	形態論の基礎概念と形態的プロセスなど		
	11	統語論 (1)	単文・節、複文、重文、従属節、主節		
	12	統語論 (2)	基本語順、項、付加語句、n項動詞、品詞		
	13	統語論 (3)	ボイス (受け身・使役・間接受身、希望文・難易文・可能文・二重主語文)		
	14	統語論 (4)	格助詞 (前接語、名詞句)、テンスとアスペクト		
15	第11回～第14回のまとめと復習	統語論の基礎概念、文の種類、品詞、ボイス、テンス・アスペクト			

授業科目	言語学 II	担当教員	山田 敦士		
対象年次・学期	1年・後期	必修・選択区分	必修	単位数	
授業形態		授業回数	15回	時間数	30時間
授業目的	言語聴覚士に不可欠な言語学的知識・分析技術の定着を図る				
到達目標	言語学に関する基礎的知識を用い、言語聴覚士として必要な分析ができる				
テキスト・参考図書等	大森孝一他編 (2018) 『言語聴覚士テキスト第3版』 医歯薬出版				
評価方法・評価基準	評価方法	評価割合(%)	評価基準		
	試験	60	期末試験、小テスト (3回実施の予定)、演習への取り組み(評価基準; 3.主体的に適切な応答ができる 2.受け身ではあるが適切な応答ができる 1.応答できない) を合わせて評価する。		
	レポート	0			
	小テスト	30			
	提出物	0			
その他	10				
履修上の留意事項	授業進行状況によって内容変更がありえる。配布資料も併用。				
履修主題・履修内容	回	履修主題	履修内容		
	1	前期のおさらい	前期学習内容のおさらい		
	2	意味論 (1)	語の意味		
	3	意味論 (2)	文の意味		
	4	意味論 (3)	日本語のモダリティ		
	5	第2~4回のまとめと復習	意味論の総復習		
	6	語用論 (1)	直示・前方照応		
	7	語用論 (2)	トピック・コメント・フォーカス・対比		
	8	語用論 (3)	敬語		
	9	語用論 (4)	ウチとソト		
	10	第6~9回のまとめと復習	語用論の総復習		
	11	文字論	文字種		
	12	言語と言語の関係 (1)	言語類型論		
	13	言語と言語の関係 (2)	対照言語学		
	14	社会言語学	記述主義と規範主義		
15	第11~14回のまとめと復習	文字論、言語と言語の関係、社会言語学の総復習			

授業科目	言語聴覚障害学概論Ⅰ	担当教員	佐々木 勇輝		
対象年次・学期	1年・通年	必修・選択区分	必修	単位数	
授業形態		授業回数	15回	時間数	30時間
授業目的	言語聴覚療士の仕事内容、考え方を知り、言語聴覚士とは何かを理解する。				
到達目標	医療従事者としての心構えを理解できる。 言語聴覚士がどのような仕事なのかを知り、言語聴覚士として働く自分をイメージすることができる。				
テキスト・参考図書等	(教) 言語聴覚士テキスト 第3版 著者名：大森孝一他 発行所：医歯薬出版				
評価方法・評価基準	評価方法	評価割合(%)	評価基準		
	試験	0	レポート、提出物で評価を行う。		
	レポート	30			
	小テスト				
	提出物	70			
その他	0				
履修上の留意事項	「言語聴覚士」・「医療人」としての仕事を深く理解するための重要な科目なので意欲をもって参加すること。				
履修主題・履修内容	回	履修主題	履修内容		
	1	言語聴覚士とは	言語聴覚士の役割、働く場を知る。 言語聴覚士になるために必要な臨床実習、国家試験などを知る。		
	2	医療従事者としての言語聴覚士	医療従事者としての心構えを理解する。		
	3	言語聴覚障害学総論	言語聴覚士の歴史と現状について学ぶ。		
	4	言語聴覚療法の実践	グループワークにおいて、病期別の評価・診断の目的・訓練、他職種連携について学ぶ。		
	5	言語聴覚士の仕事①(成人)	言語聴覚士の仕事について先輩 ST から話を聞く。		
	6	言語聴覚士の仕事②(小児)	言語聴覚士の仕事について先輩 ST から話を聞く。		
	7	コミュニケーションについて	本質、目的、構成要素、ノンバーバルコミュニケーション		
	8	言語聴覚士と倫理	業務と倫理、パターンリズム、インフォームドコンセント等		
	9	理学療法士の仕事	理学療法士の仕事を知る。言語聴覚士との関係について知る。		
	10	作業療法士の仕事	作業療法士の仕事を知る。言語聴覚士との関係について知る。		
	11	臨床実習にむけての準備①	臨床実習に向かううえでの心構え、姿勢について学ぶ。		
	12	臨床実習にむけての準備②	ケースレポート・サマリー・発表スライドの作り方について学ぶ。		
	13	国家試験関係	国家試験について、解き方、現在学習している内容がどう結びついていくかを学ぶ。		
	14	国家試験関係	国家試験問題を解く。解説作り。		
15	国家試験関係	国家試験問題を解く。解説作り。			

授業科目	言語発達学	担当教員	箭本 尚子		
対象年次・学期	1年・前期	必修・選択区分	必修	単位数	
授業形態		授業回数	15回	時間数	30時間
授業目的	言語発達の概要を、発達段階や言語機能の諸側面および各機能との関連の観点から学習し、子どもを評価・支援する際に必要な言語発達の基礎知識を得ることを目的とする。				
到達目標	各発達段階の発達を理解する。				
テキスト・参考図書等	(教) 言語聴覚士テキスト第3版 編者名：大森孝一、他 発行所：医歯薬出版株式会社				
評価方法・評価基準	評価方法	評価割合(%)	評価基準		
	試験	60	定期試験・小テスト・授業内での発表等を合わせて評価する。		
	レポート	0			
	小テスト	30			
	提出物	0			
	その他	10			
履修上の留意事項	・欠席せず、復習をすること。				
履修主題・履修内容	回	履修主題	履修内容		
	1	言語発達の基盤・前言語期の発達①	オリエンテーション、言語発達の3つの基盤について、音声知覚能力の発達		
	2	前言語期の発達②	発声行動の発達		
	3	前言語期の発達③	コミュニケーション行動の発達		
	4	前言語期の発達④	認知機能の発達		
	5	前言語期のまとめ	前言語期の言語発達の振り返り		
	6	幼児期の発達①	初語の出現と語彙の増加、言語発達を促す大人の関わり		
	7	幼児期の発達②	語彙・構文の発達		
	8	幼児期の発達③	談話能力の発達		
	9	幼児期の発達④	音韻意識の発達		
	10	幼児期のまとめ	幼児期の言語発達の振り返り		
	11	学童期の発達①	読み書き能力の発達		
	12	学童期の発達②	語彙・構文の発達		
	13	学童期の発達③	談話能力の発達		
	14	学童期のまとめ	学童期の振り返り		
15	言語発達を説明する理論	生得説、学習説、認知説、社会・相互交渉説			

授業科目	言語発達障害Ⅰ		担当教員	小屋 雄二	
対象年次・学期	1年・前期		必修・選択区分	必修	単位数
授業形態			授業回数	15回	時間数 30時間
授業目的	言語発達障害について、その要因としての各障害の概要を学ぶ。				
到達目標	ことばは、周囲の人・物・音・光など環境からの刺激を受け、聴覚や視覚などの感覚器、発声発語の運動機能、脳機能などが年齢とともに成熟することにより発達してくるものである。したがって、子どもの側にその成熟を遅らせる要因、すなわち発達障害があれば、言語発達は遅れてしまう。又、それらの機能の成熟を促すための環境に問題があっても、言語発達は遅れてしまう。この授業では、標準的な言語発達を基盤として、それに基づく各障害を理解するための基礎を学ぶことを目標としている。				
テキスト・参考図書等	(教)「言語聴覚士テキスト 第3版」		著者名：大森孝一	発行所：医歯薬出版	
評価方法・評価基準	評価方法	評価割合(%)	評価基準		
	試験	90	上記の評価割合で総合評価を行う		
	レポート				
	小テスト	0			
	提出物	5			
その他	5				
履修上の留意事項	他者を気にせず、質問を通してより授業が深化する方向で授業に臨むこと。				
履修主題・履修内容	回	履修主題	履修内容		
	1	発達とは	自己紹介、発達とは		
	2	言語発達障害とは	障害、言語発達の阻害要因		
	3	発達の生理学	神経系の発達		
	4	発達の病理学	発生異常、周産期異常		
	5	基本情報の収集	情報収集の方法（行動観察、面接法）		
	6	早期発見・早期療育（1）	母子健康手帳・乳幼児健康診査		
	7	早期発見・早期療育(2)	スクリーニング検査（ことばのテスト絵本）演習		
	8	知的能力障害（1）	症状と定義		
	9	知的能力障害(2)	癲癇とその対応		
	10	自閉症スペクトラム障害（1）	症状と定義		
	11	自閉症スペクトラム障害（2）	武蔵野東学園の教育		
	12	脳性麻痺	症状と定義		
	13	限局性学習障害（1）	症状と定義、ディスレクシア		
	14	限局性学習障害（2）	CARD 演習		
15	注意欠如・多動性障害、療育支援	ADHD の症状と定義、地域支援・家族支援について			

授業科目	言語発達障害Ⅱ	担当教員	佐々木 勇輝		
対象年次・学期	1年・後期	必修・選択区分	必修	単位数	
授業形態		授業回数	15回	時間数	30時間
授業目的	知的障害・コミュニケーションについて学ぶ。検査演習を用いて、評価の方法について学び、子どもに関わる言語聴覚士のイメージを掴む。				
到達目標	① 知的障害とは何か、歴史、定義、原因、発達特性について概観する。 ② 知的障害児の言語・コミュニケーションの特徴について理解する。 ③ 知的障害児の評価の仕方について理解する。 ④ 認知、言語面に関する指導法を理解する。				
テキスト・参考図書等	(教) 標準言語聴覚障害学 言語発達障害学 第2版 著者名：藤田郁代 発行所：医学書院				
評価方法・評価基準	評価方法	評価割合(%)	評価基準		
	試験	80	定期試験と小テスト、提出物を合わせて評価する。		
	レポート	0			
	小テスト	15			
	提出物	5			
その他	0				
履修上の留意事項	欠席しないこと、復習をすること。				
履修主題・履修内容	回	履修主題	履修内容		
	1	知的障害とは	歴史、定義、原因		
	2	正常発達について	言語・社会性・コミュニケーション・運動発達		
	3	正常発達・知的障害児の特徴	言語発達の過程、認知及び象徴機能の遅れ		
	4	知的障害児の特徴	言語理解・表出・全般的な発達の遅れ		
	5	知的障害の原因	出生前のスクリーニング検査、染色体異常等		
	6	ビデオ鑑賞	アイアムサム鑑賞		
	7	知的障害の評価	情報収集、インタビューの書き方		
	8	知的障害の評価	知能検査の種類、適用年齢等		
	9	知的障害児の支援	指導・支援を考える上でのポイント		
	10	知的障害児の支援	個別指導とグループ指導、マトリックス法、S-S法、プレイセラピー等		
	11	知的障害児の支援	家族支援について		
	12	知的障害児の支援	乳幼児期の支援（乳幼児健診と療育システム、AAC）		
	13	知的障害児の支援	学童期の支援（特別支援教育、インクルーシブ教育）		
	14	知的障害児の支援	児童福祉法、療育手帳について		
15	国家試験	国家試験問題を解く			

